富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

# Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第26号
(2010年3月31日発行)

内地留学生の研修の様子

センターニュース26号　目次


| | | |
|---|---|---|
| 02 | 巻頭言 | 声援の効果 |
| 03 | 挨拶 | 実践総合センターの目的と役割 |
| 04 | 寄稿 | 客員教授報告（本多 信昭） |
| 05 | 寄稿 | 客員教授報告（寺西 康雄） |
| 06 | 報告 | 教員・学生のための教育講演会 |
| 07 | 報告 | ビジュアルトライアスロン2009 |
| 08 | 学園通信 | 附属学校園から（附属幼稚園・附属小学校・附属中学校） |
| 09 | 学園通信 | 附属学校園から（附属特別支援学校） |
| 10 | 報告 | 第11回発達と臨床の公開講座 |
| 11 | 報告 | 第12回発達と臨床の公開講座 |
| 12 | 報告 | 平成21年度　内地留学生より |
| 13 | 報告 | センター協議会報告 |
| 14 | 報告 | 教大協北陸地区会議報告 |
| 15 | 報告 | 業務報告 |
| 16 | 業務報告 | センターの相談件数・編集後記 |

# 巻頭言　声援の効果

人間発達科学部　学部長　北村　潔和

バンクーバーで開催されている冬季オリンピックが終盤に差し掛かっている。精神的にも、肉体的にも、究極のトレーニングを積んできた若者の祭典だ。人が成しえる極限の世界は、観る人の心をつかむ。

鍛えに、鍛えてきた選手であっても、競技後でのインタビューでは、多くの声援を受けてパフォーマンスが上がったと答えている。どんな人にとっても、自分を取り巻く人の声援が、その人の行動に大きな影響を与えるようだ。

運動生理学の世界では、声援を受けたり、掛け声を発したり、驚かされたりして、随意的に発揮できる最大筋力の高まることが証明されている。このことを知っていると、運動中にうまく人に関ることによって、その人のパフォーマンスを高めることができそうだ。わかっているようでわかっていない、面白い現象だと思っている。

以前、ゼミの学生が、「ほめられる」「おこられる」どちらがパフォーマンスを高めるのだろうかと話に来たことがあった。それは、自分の体験や友達との話の中で、自分は「ほめられると力を発揮する」、また、「ある学生はおこられると力が発揮できた」との話があり、どちらが本当なのかとの中で起こった疑問だと。指導者になりたいので、どちらが正しいのかと知りたいとことだったと記憶している。

私のゼミは運動がキーワードのゼミであったので、運動の途中で「ほめる（声援する）」、「おこる（ネガティブな言葉を投げかける）」、「まったく無視する（声をかけない）」の条件で運動のできばえを比較してみようとなった。

ほめ言葉、ネガティブな言葉は、160人の学生アンケートから決めて、その言葉をタイミングよく運動中の被験者にかけることで実験しようと決めた。

結果は、「ほめる」「おこる」ことの両方でパフォーマンスが向上した。いちばんパフォーマンスが悪かったのが、「無視する」の条件であった。この結果をどう考えるかについて、ゼミで議論した。「ほめる」「おこる」の共通的な事柄は何かとの話になり、どちらも運動している被験者をみていて、声をかけていることに気がついた。それに対し、「無視する」は、被験者に「じゃこの運動をしてください」と指示した後は、まったく被験者をみていない条件であった。この違いがパフォーマンスに影響を与えたのではないかとの話になった。なげかけられる言葉の問題よりも、人は、「自分をみてもらっている」、「存在を認めてもらっている」ことの実感が、がんばれる力となるのかねと話したことを覚えている。

この実験は、私の学生に対する接し方に大きな影響を与えたと考えている。人のパフォーマンスを高めるには、無視することなく、その人の存在を受け入れて、どんな言葉でも、その人に投げかけることが大切なのだと。指導者として必要な素養かもしれないと思っている。いま、私にできることは、学生に言葉をかけることだと。どんな言葉がいいかを考えている。

# 挨　拶　「実践総合センターの目的と役割」

センター長　小川　　亮

思えば平成元年に上越教育大学附属学校教育研究センターに講師として採用されてから、昨年でセンター教員として20年が経過したことになる。昨年５月にセンター長を拝命し、ご挨拶をさせていただくこととなった次第である。

実践総合センターは、全国の各教員養成学部に教育工学センターが設置される流れの中で1982年に教育学部附属教育実践研究指導センターが設置され、その後2000年４月に教育実践総合センターに改組され定員が専任教員４名に増えた。さらに2005年10月の３大学統合に伴う学部の改組によって、附属人間発達科学研究実践総合センターに名称が変更になり、現在の３研究部門（教育臨床研究部門・学習環境研究部門・教育工学研究部門）に至った経緯をもっている。現在は専任教員６名（欠員２名）、客員３名、センター長１名（兼任）の10名の定員（現員７名）と事務補佐員１名で教育と研究と実践に努めている。

このような変遷を経ながらも、一貫して「学校教育を中心とした教育の改善」を目標とした、教育・実践と研究・開発に取り組むセンターとして活動を続けてきたことは、実践総合センターのあり方を明確に示していると言える。現在の３つの研究部門も、それぞれ守備範囲が異なるが、教育臨床・教育実践・現職教育・教員養成・情報教育といった課題に対して、具体的な実践を通して教育の問題解決を目指している点で共通している。また、教育実践研究を公表する場として実践センター紀要を刊行している。このような現状に内包された、問題点を検討することで、今後の実践総合センターの課題も見えてくるものと思う。

私見ではあるが、４つ問題点をあげてみたい。

（１）教員養成（教育実習）に関する学部との協力のあり方の問題
（２）センター所員としての業務と、学部教員としての教育と研究のバランス
（３）学部が対応するべき最新の教育問題に対応するセンターの役割の問題
（４）実践総合センターの組織の問題

ここでは、文面の関係から、（１）と（２）の問題だけに絞って、言及する。

実践総合センターは、伝統的に教育実践や教師教育を研究する部門が置かれてきた経緯から、教員を養成する大学の活動について主体的にかかわることが役割である。しかし、すべてを学習環境研究部門の専任教員１名だけで取り仕切ることには無理がある。また教育実習は教務委員会、教員養成対策は学生生活就職対策委員会の仕事であり、実践総合センターは教育実習の事前指導と事後指導に関わるだけである。実習校と大学を結ぶ教育実習連絡協議会についてもセンター長は司会役を務めるが、センターの教員の出席の義務はない。教育実習と教員養成について全般的総合的にコーディネートする役割を果たす集団が明確に存在しない現状には、問題があると感じる。教職実践演習や教員養成の６年制など、新たに解決するべき（かもしれない）問題をかかえている現状においては、特にそうである。

センターのスタッフは、同時に人間発達科学部の教員である。つまり、センターの業務以外に、通常の学部の教員と同様に学部と大学院の授業ならびに委員会等の業務を担っている。はたして、センターの職務と学部教員としての職務のバランスをどのように取るべきかという問題については、富山大学に限らず実践センターの設置されている多くの大学で共通した問題であるが、過去に様々な問題を乗り越えてきた歴史がある。センターの職務を重視すれば、学部や大学院の教育に参加出来なくなり、学部の職務を重視すればセンターの存在価値が失われる。センターの教員であることは、この２つのバランスの上に成り立っているのであり、常に多忙であることは間違いない。この点を、どのように評価し、評価されていくのかが、センターとしての問題である。

実践センター長として、このような問題について学部の教員と共有しながら、可能な限り最適な解を模索することが職務であると考えている。今回触れることの出来なかった問題についても、今後の活動の中で将来の方向性を探っていきたいと考えている。

# 寄　稿　全国一斉学力検査、体力テスト その実施結果を生かそう

センター客員教授　本多　信昭

８月末、全国学力テストの結果が発表された。富山県の小学校６年生の成績（平均点）順位は、国語も算数も昨年の全国６位以内から６位以下に下がった。平均点は全国より高いからとはいうものの、教育に携わってきたものとしては何となく気にかかる。どんな問題に弱いのか、原因はどこにあるかと思案していたら、国立政策研究所 HP からデーター（各設問別、正答数と無回答数）を取得することができた。小学校は、国語も算数も秋田県と福井県が全国１、２位であった。そこで両県と各設問別に有意差検定を行った。以下はその結果の集計である。

**◇正答数**
**富山県が他県に比べ、優る又は劣る設問数**

| 領域 | 秋田県 | | 福井県 | | 全　国 | | 領域別設問数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 優 | 秀 | 優 | 秀 | 優 | 秀 | |
| 国語Ａ | 3 | 6 | 0 | 10 | 7 | 1 | 18 |
| 国語Ｂ | 0 | 10 | 0 | 9 | 2 | 0 | 10 |
| 算数Ａ | 0 | 8 | 0 | 4 | 5 | 1 | 18 |
| 算数Ｂ | 0 | 13 | 1 | 4 | 8 | 1 | 14 |

**◇無解答数**
**富山県が他県に比べ、少ない又は多い設問数**

| 領域 | 秋田県 | | 福井県 | | 全　国 | | 領域別設問数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 少 | 多 | 少 | 多 | 少 | 多 | |
| 国語Ａ | 0 | 14 | 0 | 16 | 13 | 1 | 18 |
| 国語Ｂ | 0 | 10 | 0 | 10 | 10 | 0 | 10 |
| 算数Ａ | 0 | 17 | 0 | 15 | 8 | 1 | 18 |
| 算数Ｂ | 0 | 14 | 0 | 14 | 11 | 0 | 14 |

**◇正答数：**　当然ながら両県より劣る項目が多く、優った４項目は、秋田県国語Ａ領域で「漢字を書く（人の意見にさんせいする）」「ローマ字で書く（くすり）」「ローマ字を読む（happa）」という３設問と福井県算数Ｂ領域で「グラフより大小関係を捉え、判断のわけを書く」という最後の設問であった。

**◇無解答数：**　無解答数が多いのは、ほとんど全設問である。落ちこぼされた子や学習意欲欠如の子が多いのではと気懸かりである。今年度学びのアシストの報告では、学習等不適応児に対応している報告が目立つ。彼らには「ゆっくり優しく聞き役に徹することから」を合い言葉に支援するよう勧めている。その効果もあり学習参加し始めたという報告が多い。今後の成長が期待できるところである。

そんなことを考えていたら、12月に全国体力テストの結果が報告された。新聞見出しは「富山今年も平均上回る」とあった。秋田県と福井県の体力テスト順位は、と調べたら、やはり１、２位であった。よく遊び、運動する子は脳の発達を促進するという大脳生理学の理論を思い出した。

昭和62年、私はある地域教育センターで、地域内小中学校の体力テストを種目ごとに県平均と有意差検定しその優劣を表にまとめた。弱い種目について体育教師に簡単なトレーニング法を考えてもらい、各校が継続的に取り組み次年度の向上を目指すようお願いした。偏差値での指導を取り入れている学校にはスポーツテストの記録を偏差値に換算し個人内評価をしやすくした。子どもたちは「努力し続けた来年の自分は今の自分ではない。がんばりを見て欲しい。」と言えるよう頑張っていくのである。残念ながら年度末異動でその後の成果を確認する活動はできなかった。

せっかくの検査、テストである。「面倒だ、効果がない」という前に時間をかけたものは無駄にしないで活用を考えて欲しい。遊びや体力作りが成績向上につながれば教師冥利に尽きるではないか。

# 寄　稿　「けん玉セラピー」

センター客員教授　寺西　康雄

「けん玉セラピー」とは私の造語である。今から27年前、不登校児童から手ほどきを受けて以来、けん玉は、私にとって、遊びを中心としたプレイセラピーのなくてはならないツールの１つである。

けん玉が不登校克服の契機となったと思われる子どもがいる。その１人がＡくん（中3）である。

Ａくんは小学校時代に不登校となり、家族以外の人とは言葉を交わすことができなかった。中学校入学後も相談室登校が続き、３年生になり何とか教室に入ることができた。しかし、黙して語らず、頭を垂れ身を堅くしているＡくんを案ずる担任から相談があり、私がＡくんを担当することになった。

初回面接時のＡくんは、終始、無言で無表情だった。私は「よくきたね」と声をかけ、早速、けん玉の技を実演した。長く伸びた前髪の隙間からうかがうようにしながら、私の一挙手一投足を見つめていた。「やってみないか」とけん玉を手渡すと素直に受け取った。手取り足取りして教えながら、少しでもよいところを見つけて褒めた。基本技の「大皿」ができるようになり、「けん玉道級位認定表」の10級に合格した。それ以来、週１回、「けん玉セラピー」と母親面接を継続することになった。

Ａくんは、めきめき上達し、順調に「けん玉道５級」まで昇級した。だが、難易度の高い技「ふりけん」でつまずき、４級の「壁」に何度も跳ね返された。ある日、ついに「ふりけん」が決まり、４級に見事合格した。その瞬間、Ａくんの表情がゆるみ、微笑が浮かび、満面が笑顔となった。そのときまで、能面のように無表情だった彼が、この日、初めて笑ったのだ。私はＡくんと堅く握手した。

その後のＡくんの変容ぶりは、目覚ましかった。家庭では、家族との会話が増え、声を上げて笑うようになった。顔つきが変わり、感情表現が豊かになった。洗濯物を干すなど家の仕事を自ら進んで手伝うようになった。学校では、背筋が伸び、身のこなしが柔らかくなった。顔を上げ、目を合わせて教師や級友とのコミュニケーションを図ることができるようになり、毎日、登校することができた。

３月、無事卒業し、新たな人生へ旅立ったＡくんから、ある日、私のもとに一通の手紙が届いた。

> カウンセラーの寺西先生へ
>
> 寺西先生のおかげで、けん玉が大好きになりました。けん玉で自信と勇気をもつことができました。今度は僕が、困っている人にけん玉を教えて、元気にしてあげたいです。
>
> 寺西先生に会うのは、とても楽しみでした。これからも、たくさんの人にけん玉を教えてください。また会えるのを楽しみにしています。

「けん玉で自信と勇気をもつことができた」。この言葉は、私にとって励みであり支えである。今後も本センターのプレイルームを訪れる子どもに対して、「けん玉セラピー」を実践していきたい。

報　告

# 教員・学生のための教育講演会

センター教授　田尻　信壹

「教員・学生のための教育講演会」（学習環境部門主催）が 平成21年11月19日（土）午後２時～午後５時に、人間発達科学部141講義室を会場に実施されました。講師は埼玉県立秩父特別支援学校教諭の高橋（旧姓、坂本）浩美先生で、「『旅立ちの日に』　その後　～特別支援学校での実践～」の演題で講演頂きました。また、丸杉國子さんにピアノ伴奏のご協力を頂きました。当日は120名を越える方々の参加があり、会場に人間発達科学部第１棟で一番広い教室を用意しましたが、席が足らず、隣室から椅子を運ぶほどの盛況でした。

講師の高橋浩美先生は、「旅立ちの日に」を作曲した方です。「旅立ちの日に」は、卒業式で一番歌われている曲です。「白い光の中に　山なみは燃えて　はるかな空の果てまでも　君は飛び立つ」の歌詞をご存じの方も多いかと思います。この曲は、今から19年前（平成３年）に、卒業生を送るために埼玉県のある中学校の校長が作詞し、若い音楽教師（講演者の高橋先生）が作曲したものです。最初は「卒業生を送る会」で教師たちから卒業生に向けて歌うためのサプライズ曲のはずのものでしたが、その後歌い継がれ、現在では全国の学校で一番歌われている曲となりました。また、この曲はSMAPが歌ったことでブレークしたことでも有名です。芹洋子、トワ・エ・モワ、ダークダックス、秋川雅史、中孝介など多くの歌手によってもカバーされています。近年は、東京ディズニーシーのCMソングとして使われています。

高橋先生は、今から８年前、自ら希望して養護学校（特別支援学校）に異動され、そこで音楽を通しての教育実践を行われています。講演では、高橋先生に「旅立ちの日に」に込められた思いや、音楽を通しての子供たちの変容や成長について、お話頂きました。また、講演の途中に高橋先生から直接ご指導頂き、「たいよう（太陽）のサンバ」でのダンスや「きみにとどけよう」の合唱を行いました。最後に、高橋さんの指揮で「旅立ちの日に」を全員で合唱しました。旋律が進むに連れて、参加者たちは感極まり、泣きながらの合唱となりました。高橋さんも涙をこらえての指揮でした。全体で３時間を越える講演会でしたが、お話だけでなくダンスや合唱など盛りだくさんの内容であり、長さを感じさせない大変充実した時間でした。今回の講演会は、教師を目指す学生にとって、大変学ぶべき点が多かったのではないかと思います。

高橋浩美先生（左）と参加した学生たち

# 報　告

## ビジュアルトライアスロン 2009

センター教授　小川　　亮

平成21年11月20日（金）から22日（日）にかけて、ビジュアルトライアスロン2009が開催されました。本年度は場所を３棟５階のアトリエに移して、48時間でストーリーのある映像を作成する作業を行いました。学生は４つの班に分かれて、それぞれのテーマを決め、そのテーマを効果的に伝える活動に取り組んでいました。講師にApple公認インストラクターの渥美聡子さんを迎えて、プロの作成現場を大学生が体験できる場を提供するための仕掛けを組んでいます。VT2009の運営の中心となって活動した学生は当日の活動だけでなく、当日の活動を可能にする事前の準備、参加者を集めるための宣伝用のポスターや宣伝と成果の公表のためのWebページの作成などの活動を行っていてました。VT2009を行うことで、学生にとって、有効な学びの場を提供できました。

４つの班のテーマは、それぞれ以下のようなものでした。

１班「新感覚！体感アクションゲーム　携子ちゃんの冒険」

携帯電話をコントローラにした全身アクション＋体感によるバーチャルリアリティゲームを想定して、謎解き要素も含んだCMに仕上げています。

２班「カネダのカネバン」（救急絆創膏）

指を第一人称にして、日常生活で危険にさらされている状況を浮き彫りし、救急絆創膏を売り込もうとするCMです。「手」作りな感じが堪りません。

３班「（株）ナグモ」（進学・資格取得支援）

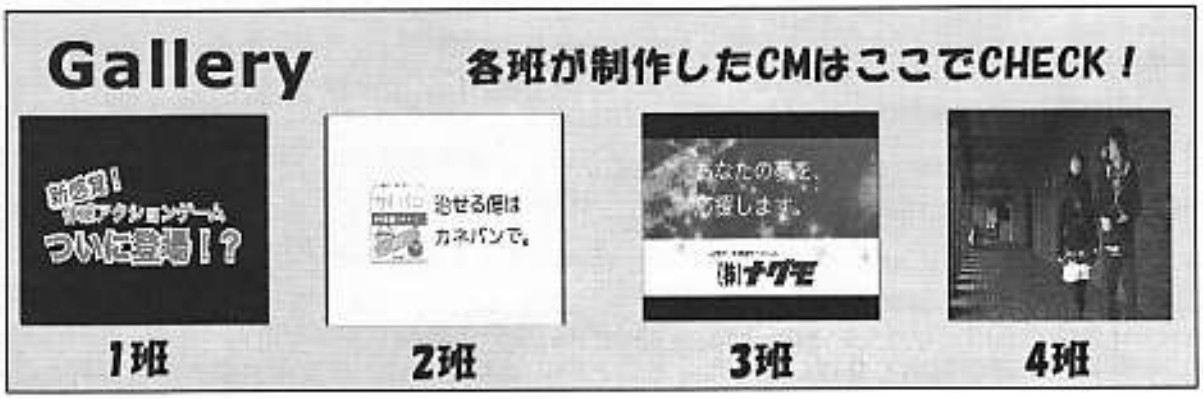
卒業を迎えた高校生が、「先生のような教師になりたかった」というカミングアウトをすることろから、人生設計支援企業？のCMが始まります。

４班「PENTAX」（カメラのCM）

カメラに魅せられた男子は、彼女よりもカメラに恋しちゃう！？

それぞれのCMの内容が気になったあなたは、下のURLでCMをチェック！

http://mmcom.edu.u-toyama.ac.jp/vt/vt09/top.html



# 学園通信

## 附属幼稚園から

附属幼稚園　吉田　真寿美

今年度は、「豊かな心をはぐくむ　～かかわる力に着目して～」をテーマに研究を進めてきました。子どもが身の回りの「もの」「ひと」「こと（がら）」にかかわろうとする際には内面に何らかの動きがあるはずだと考え、そのような場面に着目して子どもの内面を深くとらえようとしました。日々の保育の積み重ねによる子どもの変容する姿をとらえ、その変容の背景には何があったのか、どのような内面の高まりがあったのかを明らかにしようと取り組んできました。今年度も、研究を支えてくださる大学の先生方にお一人ずつ各クラスの専属として研究協力していただき、年間を通してご指導いただきました。

6月24日（木）に東京大学大学院教育研究科　教授　秋田　喜代美先生を講師にお迎えし、保育フォーラムを開催しました。県内外から200名余りの参会を得、子どもの姿をもとに「豊かな心」「かかわる力」というキーワードを共有して協議し、学びを深めることができました。秋田先生の講演では、「豊かな心」をはぐくむには、保育者が本質を見極め、本当に意味（価値）あるものを意図的に教育に生かすことができるかどうかが重要なポイントになってくるというご示唆をいただきました。保育者としての自分を振り返り、どうあるべきかを改めて考える機会となりました。

また、県新規採用教員の研修会における保育公開、協議会への協力も定着し、その中で本園の研究や保育実践の発信に努めています。今後も、様々な場や機会を通して、子どもの育ちを支える確かな保育実践力を付けるべく、研究を深めていきたいと考えています。

## 附属小学校から

### よりよく思考する子供が育つ授業の創造（2年度）
### ― 思考が活性化する比較の場の構成 ―

附属小学校教諭　城岡　恭子

附属小学校では、昨年度より「よりよく思考する子どもが育つ授業の創造」という研究主題を掲げ、研究に取り組んでいます。今年度は「思考が活性化する比較の場の構成」という副題のもと、比較することによって思考が活性化していく状況を教師がいかに構成していくのかを研究してきました。

12月5日に行われた冬の研究会では、「富山大学教授による教員向け研修プログラム」と題し、米田先生、岡崎先生、吉田先生にワークショップをしていただきました。米田先生には「課題のもたせ方・発問」について、岡崎先生には「教材開発の方法」について、吉田先生には「板書・ノート・ワークシート」について、現場の先生方がすぐに活用できるようなアドバイスをたくさんいただきました。

また、校内での研究授業におきましても、大学との連携を密にし、学部の先生方に多くの指導をいただきました。

来年度も、今年度の成果と課題を生かし、研究や実践を積み重ねていきたいと考えています。

## 附属中学校から

附属中学校・研究部主任　横野　誉子

附属中学校では、「主体性の高まりをめざす課題学習」を研究主題に掲げ、日々の実践を通して主体的な生徒の育成に努めています。「学びあい、自ら学ぶ」を副題として今年で三年目を迎え、「学びあい」が個の学習を深め、生徒の主体的な姿へと高まっていくことを授業実践を通して各教科等で明らかにしています。

6月の教育研究協議会では、社会、理科、保健体育、技術・家庭（家庭分野）、道徳、特別活動において、公開授業や部会協議等を行いました。また、全体講演会では、前文部科学省教育課程企画室長

で現在文部科学省大臣官房会計課副長の合田哲雄先生をお招きし、「新学習指導要領のねらいと背景について」という演題でお話していただきました。本校の研究内容が新学習指導要領の主旨と方向性が同じであることを改めて確認することができました。新学習指導要領のポイントの一つである、「言語活動の充実」「知識・技能の習得・判断力・表現力等のバランスを重視すること」という点では、「学びあい」を通して、自分の考えを伝えたり、他の意見や考えを聞いたり、書いてあることを読み取ったりしてそれらをもとに自分の考えを深めていく中で主体性が高まるのではないかと考えています。

前回の研究会で「学びあい」に焦点をあてて授業や発表を行いましたが、今回は「学びあい」はもとより、学びあいによって高まった個が、いかにして「自ら学ぶ」へつながっていくのかに焦点をあてて授業や発表を行いました。

校内研修では、年間を通して、全体研修会や道徳・特別活動・総合的な学習の時間の３部会研修会、互見授業とその協議会を継続して行いました。特に今年度は、互見授業を強化し、全体研修会でその協議会を行い、課題学習について教科の枠を超えて協議しました。具体的な授業をもとに協議することによって、課題学習について共通理解が深めることができました。また、富山大学総務部・企画評価グループ　八木麻理子先生をお招きし、最新の教育事情や学校評価についての研修も行いました。

今後とも、教師も生徒も共に学びあう中で、
成長し、自ら学び、他へ働きかけ、人間力を高め、生きる力を身に付けていくことができるよう取り組んでいきたいと思います。

## 特別支援学校から

附属特別支援学校　野原　秀年

特別支援学校では、研究主題を「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～地域生活につながる授業づくり～」と設定して、３か年計画で取り組んでいます。今年度は、その２年次に当たります 。

児童生徒が地域社会で主体的に活動する姿を実現するためには、まず学校生活において、その姿を実現することが大切であると考えています。そこで本研究では、児童生徒の授業への「参加」の観点をまとめ、それに沿って配慮がなされるような授業を目ざします。「参加」の観点は、次の３点です。①ねらいに沿った学習機会をできる限り多く設定する。②学習の準備から段取り、片づけまでの一連の活動を児童生徒自身が行うようにする。③集団の一員として社会的役割をもって活動する場面を設定する。特に系統的な知識・技能の習得が大きなねらいである教科別の指導を中心に、すべての授業において「参加」が実現できるように取り組んでいます。

１年次である昨年度は、教科別の指導において、「参加」を実現し、知識・技能の活用という面で成果を上げることができました。しかし、新たな知識・技能の習得が不十分になりました。

そこで今年度は、教科別の指導において「参加」を深めることにしました。「参加」を深めるとは、「参加」を実現した上に「より意欲的に取り組む中で、考え、判断し、表現しながら、より豊かな知識・技能を学び合う」姿を実現することです。そのために、児童生徒の取り組む学習課題や学習活動のあり方の見直しや、学習活動を支えるための支援環境づくりに取り組むことにしました。

学習課題については、取り組む目的や取り組んだ成果が分かりやすい連続的な設定が行われるようになり、児童生徒が意欲的に取り組む姿の実現につながりました。また、学習活動については、「調べる」「相談する」「発表する」「協議する」等の多様な活動が行われるようになり、児童生徒の課題解決力を育むことにつながりました。支援環境づくりについては、児童生徒が主体的に取り組めるように、また自分の取り組んだプロセスや成果を共有できるように教室環境や支援ツールを工夫することで、「考え、判断し、表現しながら」取り組む姿や「学び合う」姿の実現につながりました。その結果、知識・技能の習得が図られるようになりました。

＜中学部　国語科の授業から＞

本校の授業づくりを進めるにあたっては、学部の小林先生、川崎先生、阿部先生、水内先生から貴重な助言をいただき、研究を深めることができました。

# 報　告　第11回発達と臨床の心理学講座

センター専任講師　下田　芳幸

様々な家庭環境・生活背景を背負った子どもたちが増えている現在、現場で向かい合う教師には、幅広い"対応の引き出し"が求められるようになってきている。

対応の引き出しの素となる領域は様々であろうが、スクールカウンセリング活動の基盤となっている臨床心理学にも、狭義のカウンセリングにとどまらず、広く学校教育にも応用可能な技法が、多くある。第10回は、このような技法を"対応の引き出し"の一つとして、「ロールレタリング」という技法に関する講義・実習を計画・開催した。

平成21年８月1日　開催

講師

鳥取大学大学院医学研究科

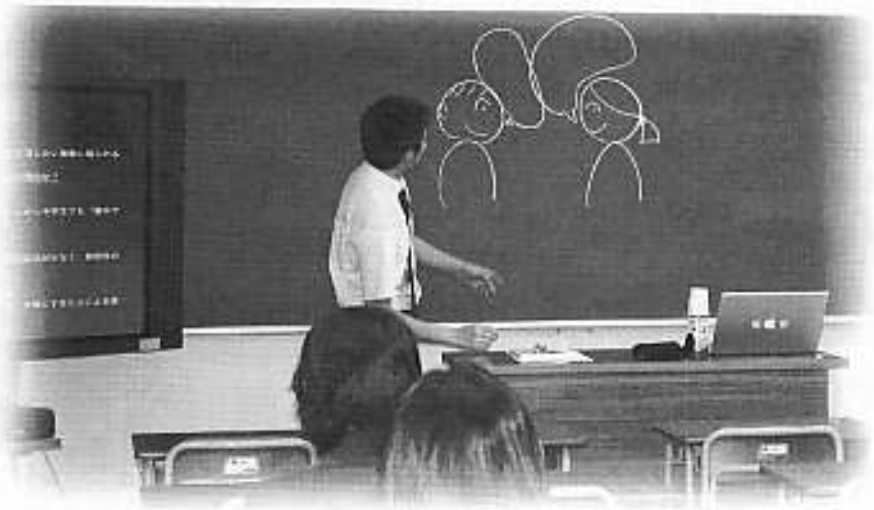
臨床心理学講座　専任講師

金子　周平　先生

テーマ

**「児童生徒の自己成長を促す ロールレタリング」**

ロールレタリングとは、役割交換書簡法とも訳される方法で、重要な他者との架空の手紙のやり取りをする方法である。手紙の相手からの返事も自分自身で書くもので、１～２往復程度実施するという、手続き自体はシンプルなものである。しかし、このやり取りを丁寧にやっていくことは、"相手の立場に立ってみる"ことを文字通り実践するものであり、子どもたちが自分自身で自分の問題を解決したり、または自分自身で気づきを得るのに役立つ方法でもある。



当日は、ロールレタリングの理論的背景や金子先生自身の実践例とともに、実習も行っていただいた。

参加者からは、シンプルながらも、自分や相手のことを振り返るよい機会になったという声や、分かりやすい方法なのでぜひ現場で実践したい、という感想を多くいただいた。

# 報　告　第12回発達と臨床の心理学講座

センター専任講師　石津　憲一郎

多様化する子どもたちをサポートするために、教師には支援の幅を広げる手法が求められている。子どもたちをサポートする技術の中には、スクールカウンセリングの基盤となっている臨床心理学をはじめとして，様々なものがある。今回の公開講座では、行動を分析し、その成果を問題行動の解決につなげる「応用行動分析」という新しい視点からの講義を行い、日頃の教育活動の幅を広げ、効果的な援助につなげることをねらいとした。

教育臨床研究部門では第12回発達と臨床の心理学講座として，「教室で使える応用行動分析の基礎」と題し，早稲田大学から大月友先生をお招きして，公開講座を開催した。

平成21年11月28日

## 「教室で使える応用行動分析の基礎」

講師　早稲田大学人間科学部 健康福祉科学科
臨床心理学系助教　大月　友 先生

我々は，子どもの問題行動を見たとき，その「原因」について考える傾向がある。そして，「原因」として，家庭環境や養育態度，本人の性格といったものを列挙していく。しかしながら，そうした「原因」を列挙することが具体的な介入につながりにくい場合もまた多い。応用行動分析では，ある行動が生起し維持するメカニズムをその場の環境に置換する。そして，具体的に抽出した環境を操作することで，維持される問題行動をターゲットとした介入を行うものである。

多くの現職の先生方にとってなじみの薄かったこの応用行動分析の視点を，いくつかの例やユーモアを含めて大月先生にはお話いただいた。

# 報　告

## 「半年間の2度目の富大生」

話し手：吉野　武士（Y），扇一　孝行（O）
聞き手：松井真一郎（M）

M：人生２度目の富大はどうでしたか？　Y：大学生のときは教育学部ではなかったので、人間発達学部で心理のこと、教科指導だけでなく、教育心理など難しいことを勉強できたよ。　O：僕はゆとりって大切だって思ったよ。現場に帰ってもこのゆとりを今まで以上に大事にしたいな。Y：現場に帰って、どんなことに役立てたい？　O：アセスメントをしっかりとすることかなあ。アセスメントって大事やな。　Y：今までとどこ違うが？　O：…。今まで以上やちゃ。　Y：子どもの気持ちを考えようと思うようになったな。今まで、「～ならない」ということを押しつけていたかも。　M：こわいY先生が、カウンセリングマインドを身につけたら、すごい先生になる！　O：何言うとるが！Y先生は今までも子どもの気持ちを大切にしとったよ。今まで以上やちゃ。　Y：アタッチメントも知らない言葉だったな。　O：うん、知らなかった。でも、何でもアタッチメントに原因を求めそうな気もするな…。　Y：我が子を見る目も変わったな。我が子が無表情だなと感じるのは、感情を表現するすべを教えたり、言葉にして返したりしてこなかったからかな。あと、もっと若いときに内地留学に来たかったな。後何年担任できるかわからんがに。やっぱり子どもに密接にかかわれるのは、担任やろ。　O：勉強、好きじゃないけど、内地留学で心理学とか学んだら、楽しくなってきたかな。M：３人それぞれ学んだことを大切に、今まで以上に現場でもがんばっていきます。お世話になりました。

# 内地留学生より

藤岡　智江

私は、長野県からの長期研修生として、富山大学人間発達科学研究実践総合センターで１年間学ばせていただきました。

大学での最初の課題は、研究テーマを絞ることでした。指導教員の先生方に広い心で支えていただきながら、時間をかけて決めていきました。今思うとそれは、自分と向き合うことや一つのことを追究することの意義を学ぶという大切な時間を過ごしていました。授業の内容は、全ての事柄が興味深く、自分自身の気持ちや体験に重ねたり、子供達に置き換えたりしながら聴講させていただきました。諸先生方が説いてくださった理論知と自分の持つ経験知を、学びの中で結びつけることができ、『学ぶって楽しい』を実感しながら、内地留学をすることの意味と今ここにいる充実感を味わわせていただきました。

心理学を学んだことにより、養護教諭として成長しなければという思いは、巻きすぎているネジを少し緩めて自分に余裕を広げ、仕事として人と関わるのではなく、一人の人間として子供達と関わっていきたいと考えるようになりました。

ご指導いただいた先生方には、言葉では表せないほどの感謝の気持ちを抱いています。初めての地、富山で出会った人々や学んだすべてのことに感謝し、再び信州でがんばって参りたいと思っています。

**報　告**

# 第75回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター専任講師　石津憲一郎

平成21年9月18日（金）筑波大学大学会館にて第75回国立大学教育実践研究関連センター協議会が行われた。富山大学からは小川センター長，田尻教授，石津の3名が参加した。

総会では年会費の徴収通知について変更があり，現行の「年会費の徴収に関する通知を前号の期間内に事務局から行う」から「年会費の徴収に関する通知を前号の期間前に事務局から行う」となった。続いて，文部科学省の初等中等教育局教職員課　課長補佐の山田泰造氏より，「教職実践演習」についての講演が行われた。情報交換では，教職実践演習についての情報交換が行われ，鹿児島大学，信州大学，北海道教育大学の3校の実践を元に意見交換等が行われた。最後にSCS代替事業では，教育実践部門からビデオ会議システムの接続テストについて報告がなされた。

---

# 第74回国立大学実践研究関連センター協議会報告

センター教授　小川　亮

平成22年2月19日（金）に東京学芸大学において、協議会が開催された。センター長として小川が出席した。文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の渡辺倫子氏から、教員養成学部の特徴を活かしながら、教員養成の質保障や現職教員の研修の充実を進める上で、実践センターが中心的な役割を担って欲しいというコメントをいただきました。議事報告として、教育工学・情報教育、教育実践・教師教育、教育臨床の各部門から、現状報告が行われた。SCSに替わる共同講義のためのテレビ会議システムの構築、センターのHPのリニューアルについて情報提供され、議論が行われた。

昼食を挟んで、「発達障害のある大学生への相談と支援について」というテーマで、東京学芸大学（橋本先生・田口先生・矢嶋先生）、信州大学（上村先生）から情報提供が行われ、教育実習や修学・就職において問題をかかえる学生に対する、富山大学を含む学生支援プログラムや、各大学の支援事業（コーディネータやセンター）に関して議論が行われた。あわせて、センター協議会で作成した教育相談に関するモジュール型コア教材を利用した、学生支援の流れについて、紹介された。次回の会議は三重大学にて平成22年9月17日（金）に開催されることになった。

全体会終了後、教育実践・教師教育と教育工学・情報教育の2つの部門の合同部会と、教育臨床の部会が行われ、各部会での課題を議論した。教育実践と教育工学の部会では、教育実践演習に関する各大学の取り組みに関する情報交換、テレビ会議システムの共通仕様の作成、センター協議会のHPの運用について議論が行われた。

報　告

# 平成21年度日本教育大学協会北陸地区会 教育実践研究指導部門研究協議会報告

表記の協議会を、平成21年11月２日（月）に当センターを会場に実施した。６大学の代表者の出席を得て、午前10時から、途中休憩をはさみながら午後４時半まで会議を行った。２つの協議題と５つの承合事項について、各大学の現状と問題点ならびにその解決策について協議を行った。有意義な協議を行うことができた。

**○協 議 題（1）各大学におけるセンターの改組と今後のセンターの役割について（富山大学）**

**○承合事項（1）センターの改組における、臨床部門の位置づけについて（信州大学）**

**○承合事項（2）新潟大学教育学部附属教育実践総合センターの全学教職支援センターへの転換（新潟大学）**

信州大学と信州大学から、センターの改組に関する情報提供がなされた。信州大学からは、学部内の議論の中でセンターの改組の可能性が小さくなったことが報告された。新潟大学からセンターが改組され、全学教職支援センターとして位置づけられたことが報告された。

上越教育大学からは、学校教育実践研究センターとして改組され、12人体制で教育実習や教師教育、教育実践について学校と社会に貢献する研究活動を行っていることが報告された。福井大学からは、平成21年度に「教育情報研究部門」と「免許更新・現職教育研究部門」を新たに設置したことが報告された。金沢大学からは、２名のスタッフで教育実践と教育相談に関する研究にあたっていることが報告された。富山大学からは、定員10であるが、専任２名が欠員であり、学部と協力して問題解決にあたっていることが報告された。

**○協 議 題（2）センター協議会を通じた北陸地区のセンター間の協力について（富山大学）**

全国のセンター協議会において提案された、センター間の連携の実現について、遠隔地におけるテレビ会議システムを利用した共同の教育と研究の進め方について検討が進められた。多対多の場合には、テレビ会議の専用システムが35万円ほどで販売されているので、これを利用することで解決法できることが分かった。今後は、センター協議会のHPを介したコミュニケーションを進めていくことが確認された。

**○承合事項（3）内地留学生の受入れ状況と指導内容，方法について**

富山大学においては，実践センターとして半年間の内地留学生を受け入れ，将来的なカウンセリング指導教員養成のための研修プログラム提供している。他のセンターでは，これまでの自身の実践を振り返り，かつ総合能力を高めるための実践がなされている大学もあるが，プログラムそのものがシステマティックになっていないことや，各大学によって指導用内容や方法にばらつきがある現状が確認された。

**○承合事項（4）実践センター附属の心理教育関連相談室の運営について（富山大学）**

指定大学院の相談室でない場合は、無料で活動しているところがほとんどであった。実践センター単独では特に開設しておらず、臨床心理士指定大学院の相談室と連携をしている大学や県の弁護士会などと連携して電話相談を含む子どもの悩み相談会を実施しているなど大学の実情に応じてさまざまな運営がなされていることが分かり今後の当大学の相談室運営に役立つ情報が得られた。

**○承合事項（5）実践センターの客員教員と学部の教職対応の特任教員の職務の分担・協力（富山大学）**

富山大学で、今年から特任教授（非常勤）として３名を雇用し、これと実践総合センターの２名の客員教授（非常勤）の職務の分担・協力関係について、他大学の取組みについて報告を受けた。新潟大学では、特任教授の方々には、全学の教育実習を担当している。全学教職センターの事務部がマネジメントしている。上越教育大では、３人の特任教授（教職大学院教員の兼任）と５人の特任准教授（任期３年、教委からの派遣）がおり、学生の直接指導を含め教育実習に関わるすべての業務を担当している。特任教員の仕事内容については、特任教員も参加するセンター内の会議で決めている。福井大学では、教職対応の客員教員が配置されていることが報告された。

# 業務報告

センター日誌

## 平成21年度の実践センターの主な行事

平成２１年

| | |
|---|---|
| ４月　１日 | 第１回センター会議 |
| ５月　７日 | 他学部教育実習事前指導１ |
| ５月　８日 | 他学部教育実習事前指導２ |
| ５月　８日 | 第２回センター会議 |
| ６月　２日 | 第３回センター会議 |
| ６月　３日 | 第１回センター運営委員会 |
| ７月　１日 | 人間発達科学部教育実習事前指導１ |
| ７月　８日 | 人間発達科学部教育実習事前指導２ |
| ７月１６日 | 人間発達科学部教育実習事前指導３ |
| ８月　１日 | 第１１回発達と臨床の公開講座 |
| ８月２６日 | 人間発達科学部教育実習観察参加事前指導 |
| ９月　９日 | 第１回センター紀要編集委員会 |
| ９月１８日 | 第75回国立大学教育実践研究関連センター協議会（筑波大学） |
| １０月　７日 | 第４回センター会議 |
| １０月２１日 | 人間発達科学部教育実習事後指導 |
| １０月２１日 | 第２回センター紀要編集委員会 |
| １０月２９日 | 第５回センター会議 |
| １１月　２日 | 日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（富山大学） |
| １１月１９日 | 教員・学生のための教育講演会（学習環境部門主催） |
| １１月２０～２２日 | ビジュアルトライアスロン2009 |
| １１月２８日 | 第12回発達と臨床の公開講座 |

平成２２年

| | |
|---|---|
| ２月　１日 | センター紀要『教育実践研究』第４号（通巻第26号）発行 |
| ２月　１日 | 第６回センター会議 |
| ２月１９日 | 第76回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大学） |
| ３月３１日 | センターニュース第４号（通巻26号）発行 |

平成21年度におけるセンターの相談件数

| | 面接による相談 | | 電話・メール相談 |
|---|---|---|---|
| | 学内者 | 学外者 | 相談件数 |
| 本人のみ | 0 | 5 | 6 |
| 保護者のみ | 0 | 47 | 18 |
| 学校関係者のみ | 0 | 1 | 0 |
| 本人と保護者など複数 | 0 | 30 | 10 |
| 教師個人 | 14 | 21 | 2 |
| 合　　計 | 14 | 104 | 36 |
| | | | 154 |

## 編集後記

日本海側の冬は雪が多く，こんなにも大変なものなのか，と思いながら12月に雪かきをしましたが，どうやら今年は「当たり年」だったようで，数年ぶりにとても多くの雪が降っているようです。また，太平洋側から来た私にとって，曇っている時間帯がとても多いことも印象的でした。しかし，富山の湿度は太平洋側と比べるととても高いため，肌が潤うという，ちょっとした幸せもまた感じています。そして，平成21年度が終わろうとしています。

今年度は歴史的に見ても政権交代が起こるなど，変動の大きな一年でした。実践センターでも昨年度の９月末で稲垣先生が転出され，４月から若手の後任が入りました。ここ２年の間で臨床教育部門の教員はすべて入れ替わり，また２人とも非常に若い教員となりました。まだまだ経験不足ゆえ，実践センターの業務を十分にこなせているとは言えません。しかし，政権交代とは違いますが，新しい力で地域とのますますの連携が行えるよう，今後とも努力を続け邁進していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。（石津 憲一郎）

印　　刷　　平成22年３月31日
発　　行　　平成22年３月31日
編集発行　　富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者　　小川　　亮
〒930-8555　富山市五福３１９０
電　話　　０７６－４４５－６３８０